

# 車いすプロジェクト タイ訪問ツアー 2000

## 活動報告

International Wheelchair Project -Youth study tour in Thailand 2000-

Nonthaburi, Thailand March 25<sup>th</sup>-30<sup>th</sup>

"Terauchi Foundation" Social Welfare Educational Program

Asahi Shimbun Social Welfare Organization Osaka

バリアフリー教育ネットワーク

### 1. ツアーの目的と意義 ~なぜ車いすを送るのかを考えるツアーに!!~

大下雅則

車いすを再生して、東南アジアや南アフリカに送る活動について、先生、保護者などに説明していると、まず、ほとんどの人は、「世の中の困っている人を助ける活動」というふうにとらえ、「大変良いボランティア活動ですね。」などの言葉をかけてくださる。このことは、うれしいことではあるのだが、一方で、「困っている人を助ける」ことのみが目的で活動をおこなっているのではないということを知っていただきたい思いを持つことがある。

また、生徒達と活動をおこなっていると、時には、めんどくさくなって「なんでこんなしなあかんねん」「なんで車いす送るん？」などの質問を投げかけてくる子がいる。また、時には、ボランティアという言葉に反発を持つ子どももいる。こういった生徒達の多くは、学校生活の場で、自己実現していく場が与えられずに、学校がおもしろくないと感じ、困っている人を助けることは良いことだと思いつつも、素直にそれを表現できないのではないだろうか？と考える。このような生徒達も、前述のような大人も、単に「ボランティア」=「困っている人を助ける」といったとらえかたをしているのではないだろうか？ボランティアや福祉とは、「善行」「社会奉仕」「やさしさ」というような「徳育・精神主義」ではなく、ボランティアを「主体的・創造的な生き方」の問題として、社会福祉を「人権保障のシステム」ととらえていくべきであると、私はこの活動を通して感じてきた。

例えば、「障害」者や高齢者の介助といった活動も、「障害」者や高齢者がかわいそうだからおこなうのではなく、「自分が同じ立場であれば、やはりそのようにしてほしいと思う」だろうからおこなうのである。そこには、「人間としての共感」があり、その基礎にあるのが「人はだれでも、みずからの責任に属さない事柄を理由として、社会的に不利益な扱いを受けない。この点において「すべての人はみな平等である。」という、人権感覚だと考える。

具体的には、「みんなと一緒に遊びたい」「学びたい」「働きたい」「映画を見に行きたい」などのような願いは現在の日本の社会では、けっして贅沢なものではなく、多くの人々が実現している願いである。ところが、「障害」のために、あるいは、国籍や民族、出身地域などといったような、その人の責任に属さない理由によって、そのごく当たり前の願いが阻まれることがある。それを「人権侵害」ととらえ、「社会的な差別」と考える。

「障害」があるために「地域の学校で、地域の仲間といっしょに学びたい」という願いを受け入れてもらえなかった子どもがいた時に、その子どもの側に立って、その人権の回復するために、支援の活動をしていくこともボランティアの一つである。これは、「映画を観にいきたい」という「障害」者の願いにこたえて、車いすを押して町に出かけることの延長線上にある活動であろう。福祉教育やボランティア教育というのは、そういった社会的な不公正に矛盾を感じ、社会的な不公正を改善していくために活動していく子どもを育てる教育であると考え、子どもたちの「人権感覚」を高め、個性豊かで主体的な人間の形成につながる学習であると考えた。

このような考え方のもとに、参加者それぞれが、なぜ、車いすを送るのか？自分達が汗を流してきた活動の意味は何だったのだろうか？ということを考え、感じていけることをツアーの最大の目的とした。

そして、実際にタイの「障害」者に出会い、彼らの生活や実態を通して、参加者一人ひとりが、車いすを送ることの意味、そして、送ることだけではなく、もっとほかにしていかなければならないと感じ、そこか



タイ民族舞踊...車いす贈呈式にて

ら、自分自身の「生き方」を考えることができたツアーになったのではないだろうか実感している。

## 2. タイ訪問交流団活動スケジュール記録

3月25日	11:10 夕	JAL623便 関空発 RAMA GARDENS HOTEL着
3月26日	午前 午後	ナンタムニバンルン中学校(ナン中学校)にて 交流会 (ナン中学校紹介のビデオ・自己紹介・活動紹介・記念品贈呈・ゲーム等) ナン中学生とともに昼食会&ナン中学校校下の地域の寺などを観光
3月27日	午前 ~ 午後 帰校	ナン中学生、先生と共に4班に分かれて「障害」者(車いすの贈呈先)の家庭訪問 A班 バンバトーン サイノイ村 ・ B班 ノンタブリ県 サイマー村 C班 ノンタブリ県 パクレット市 ・ D班 バンコク都 クロントーイ(タイ最大のスラム街) 各班からの報告会・タイ肢体不自由者協会トーポン氏&玉木氏の対談
3月28日	午前 昼 午後	車いす贈呈式(ナン中学校にて) 教育相副大臣カンチャナー氏・県知事、ラオスリハビリテーション協会、高嶺氏ら出席 日本の中学生のスピーチ・車いす贈呈・タイの「障害」者に車いすを配る 日本と携帯電話で中継 フェアウェルパーティー (日本から)ピアノ・バルーン・けん玉・折り紙・合唱「今日の日はさようなら」 (タイから)三味線・歌と踊り合唱・「約束だよ」
3月29日	午前 午後 夕	国連訪問 国連障害者専務次官 高嶺豊氏との交流・E S C A P紹介のビデオ 「アジア・太平洋 障害者の10年」のビデオ バンコク市内観光(エメラルド寺院・涅槃寺)・ショッピング フェアウエルディナー(バンコク コカレストランにて) トーポン氏・ナン中のアヌスン先生・ラオスの障害者団体3人が参加
3月30日	9:10 16:40	JAL728便 バンコク発 関空着

## 3. 「障害」者宅訪問 <バンコク クロントーイ(タイ最大のスラム街)>

クロントーイのスラムに到着した。綺麗に舗装された幹線道路から街の中に入ったとたん、自動車が対向するには狭い路地に変わった。プラティープ財団の敷地内にワゴンを止めて、「障害」者宅に徒歩で回るようになった。「障害」者宅訪問にあたって、同行して下さったトポンさんから、スラムの状況の簡単な説明を受け、「しっかり見て下さい」と参加者に言葉がかけられた。合計4人の「障害」者宅を訪問した。

一軒目は、寝たきりで、自分では何もできない人がいた。よく見ると、周りのものに手足を縛り付けられて動きを制限されていた。何もしていないと危険だからということだった。この家に入るには、一人がようやく通れるような路地に入っていかなければならない。車いすが入るのだろうかという疑問があった。母親の話では、散歩につれていきたいと思っているのだが、体力的にきついので、車いすがあればと願っていた。この一軒目に訪れた家の付近の異臭にも、参加者はショックを受けた。ヘドロの臭いが路地に入ると、私たちの鼻についた。あの臭いは、日本に帰ってきてからでもすぐに思い出すことのできる強烈な臭いだった。二軒目の「障害」



クロントーイ(タイスラム)の障害者を訪問。病院で治療を受けられないにとて障害を持った人も数多くいた。

者は、糖尿病から、片足を切断してしまった60歳過ぎの女性であった。家族と一緒に話をして下さったが、それよりも何かを訴えるような、また、あきらめているような、輝きの失せた視線を私たちに向けている女性を見ていて胸が詰まる思いだった。三軒目は脳に「障害」のある男性で、参加者の中に同じ様な症状の祖母がいて、その男性の姿が自分の祖母の姿と重なって見えて、涙ぐんでいる生徒もいた。何か訴えるように、目に涙を浮かべながら手を差し出してきたが、その場ではどうしたらいいのか分からなくて、後から「手を握って挙げれば良かった」と後悔する生徒もいた。四軒目の「障害」者は知的「障害」者で、話すことができない女性だった。最初は突然大勢の人が訪問したので、驚きの表情で緊張していた女性であったが、玉木氏と握手をして、ようやく笑顔がこぼれた。三軒目の訪問の時に後悔していた生徒が、女性の手を取って握手を交わした。道中、生徒たちと「何ができるのか」と考えたが、答えはまだ見つからない。答えを見つけることよりも、実際に見た光景にショックを受け、その現実を受け止めることが精一杯であった。しかし、すべての参加者の心に、「車いすを送っているだけではいけない。他にもやるべきことはある。」という気持ちが湧いてきたことは確かである。生徒たちの感想の中に「たまらん！」というものがあつたが、その言葉の中に多くの意味が含まれていたことは、生徒の目を見てみると、それだけで十分に伝わってきた。

#### 4. 車いす贈呈式

ナン中学の全校生徒と県知事や地域の人そして、今回のツアーをコーディネートしていただいた"トーポンさん"・国連 ESCAP の"高嶺さん"が到着し、前日各班が訪問した「障害」者の方々や、福祉局やトーポンさんが組織する障害者団体から招待した車いすを必要とする人、合わせて約800名が会場に集まり贈呈式が始まった。

はじめに、ナン中学のブラスバンド・民族舞踊でオープニング、その後校長先生の挨拶・日本側生徒(堤さん・深田さん)の英語でのスピーチ・文部副大臣"カンチャナー氏"にナン中学で修理した車いすと日本から贈った車いす120台の目録贈呈を行い、それを受けカンチャナー氏の挨拶があった。内容は、タイ王国の未来に向けての教育の指針と、それに向けた「障害」児の教育施策であった。続いてラオスの障害者協会の代表に、カンチャナー氏より車いすの贈呈をおこなった。次にステージで、ナン中学の生徒による、車いすダンスが披露された。その後ようやく、招待した車いすを必要とする人たちに対して、その体型や「障害」に合わせた車いすを選ぶ作業が始まり、タイと日本の生徒が、一緒にその作業にあたった。前日に訪問した人を見つけて来て、「これがいい!」「こっち方がいい!」と車いすを選んでいながら実際に手渡していった。前日訪問した9歳の少年は、寝たまの姿勢が多いため、座る姿勢がうまくいかず、泣きべそ顔で車いすに座っていた。視界から消えるまで少年を押しのおばあちゃんは、振り返っては合掌し、感謝の気持ちを伝えてくれた。

しかし、考えさせられる場面にも出会った。前日訪問したバンコクのスラム街、クロントーイの人たちが、早くから学校に着いているのに、式典の会場に入っていないことがわかった。いよいよ式典が始まり、車いすを合わせる作業へと進んでも彼らは会場に来ない。結局他の人たちが、すべて選び終わって、みんなが帰っていった後、残りの車いす数台を会場の外で受け取り、最後に帰っていった。「同じように車いすを必要としているのに、それを受け取るのに、公平に機会が与えられていないのではないか。」「クロントーイ(スラム街)に住んでいるというだけで、偏見や差別意識がある。」「同じタイの「障害」者の間でも、連帯感が無く、住んでいる地域による偏見を持っている。」生徒達は、タイの社会の矛盾を直接感じ、悔し涙を流す子もいた。「車いすを送るだけではなくもっと他にも何かしていかねば。」とそれぞれが強く心に感じていったと思う。



トーポン氏と玉木氏の対談

#### 5. 参加した生徒の感想より・・・

タイツアーに参加して 大阪市立東住吉中学校 3年

私は去る3月25日から30日までタイ国へ行きました。それは日本から送った「リサイクルした車いす」がどのよ

うに使われているか。また、現地の中学生や人々とふれ合うことが目的でした。生活習慣や食事など、文化全体の違う国へ行き 6 日間過ごせるのが一番不安でした。「友達ができるだろうか」「英語でのあいさつや自己紹介」など、大きなハードルがいっぱいありました。しかし、行ってみて心配していた以上の楽しさや、発見があり、大変よかったですと思いました。一番印象深かったことは、車いすの寄贈式の時に、スラムの人達が警備員の人に会場に入るのを止められている姿。そして、会場の中では車いすを送られる人が、「あの色がいい」と自分の好みを行って選んでいた姿でした。一方の人は自分勝手なことを言い、もう一方は会場へも入れない。とても不公平だと思いました。その次に心に残っているのは、グループごとに「障害」をもっている人の所へ行った時、水上生活をしている人の所で、各家(船)へ行くのに、板の橋のようなものを渡ること。車いすがあっても生活の中で使っていくのは、とても難しい問題があると感じました。今回タイへ行って見て、想像していたことと全く違うということがわかった。現実を見て、それに合った方法で、私たちはボランティアをして行かないと、自己満足のボランティアつまり、押し付けになってしまうのだということが、とてもよくわかった。私が参加する前に不安に思っていたことは「実際にその場ならないと、どうにもならないことなのだ」と思いました。またコーディネーターの玉木さんの優しい応援が、とても心強かったです。最後に、私たちがタイへ行き、見たり聞いたりしたことを、家族や友だちなど私たちの周りの人に伝えて行き、本当は何が必要なのかを見てゆけるようになるうと思いました。この 6 日間は、これからの私の一生に大きな影響を与えてくれるだろうと思います。指導して下さいました皆さんに感謝します。

タイについてー 大阪市立中島中学校 2年

タイに行く前、自分はタイのことを何も知らないと、タイの町はキタナイ、「障害」者は怖いとか、いろいろ思ってた。でも、タイに行って、実際ちがうねんなって分かった。町はキレイで、タイの人たちは、思っていたより、優しく、めっちゃいい人たちばかりやった。

3月27日(月)「障害」者の方々の自宅訪問」では、自分的に、感動したりびっくりしたことが、いっぱいあった。4つの家にまわって本当に、いろいろ、知ったことがいっぱいあった。

1つは、タンチョウさんです。チョウさんは1人暮らしで奥さんはかんごふさんです。奥さんと知り合ったのは、チョウさんが17年前に病気になって入院した時にしりあったそうです。チョウさんは今の生活がとても暮らしやすいと言っていました。自分が思うには、めっちゃ、暮らしにくそうで、車イスで1人暮らしってゆうのは、生活しにくそうやった。

もう1人は、ソンモアンさんです。モアンさんは53歳の男の人です。モアンさんは、50年も寝たきりで外には1歩も出たことがなかったそうです。モアンさんは4ヶ月前から車イスをもらったそうです。でも、外に出た距離は家の少し出たところまでで、外には出たくないと言っていました。だから、友達も1人もいなくていつも家にこもりきりだそうです。自分的には、50年間も外に出ないなんて考えられへんし、友達のいない世界も考えられへん。でも、モアンさんはこゆう生活なんやねんなって思った。

ナン中学との交流は、ナンバーコールとか、ナンバーコールの罰ゲーム(あひるのマネ)とかいろいろあって、めっちゃたのしかった。「車イス贈呈式」の時は、みんな車イスを選ぶのにニコニコして選んでた。幸せそうに選んでた。贈呈式が終わってから、ナン中生とFairwell Partyをしてもらった。お別れの

時に、日本の歌を歌った。そしたらナン中生も歌ってくれた。言葉は通じひんかったけど、心と心がつながってたから、号泣号泣でした。でも、いい思い出になった。これからも、まだ分からん部分がいっぱいあるから、勉強していきたいと思う。それと、車イスを持って帰ってくれた人たちは今後どうなっているのかってゆうのも考えていきたい。タイに行って本当に勉強になった。それに、最高の思い出になったと思う。



ナン中学校の生徒と共に家庭訪問

この子は12歳であった。